

【聞き取り検査】

中学校三年生の佐藤さんのクラスでは、国語の授業で、「学校にチャイムは必要か」をテーマにして、「必要である」「必要でない」の二つのグループに分かれて討論をすることになった。中村さんは「チャイムは必要でない」、山田さんは「チャイムは必要である」のグループであり、最初にそれぞれのグループから意見を述べ、その後で互いに反論し合うという形式をとった。その討論の一部と、それについての「問い合わせ」を一度聞き、答える。

佐藤

司会の佐藤です。では、これから討論を始めます。今回は、授業の始めや終わりなどの時間を知らせるチャイムを取り上げて、「学校にチャイムは必要か」というテーマで討論を進めます。まず、中村さんから、「チャイムは必要でない」という立場で、意見の発表をお願いします。

中村

はい。私たちには、チャイムは必要でないと思います。理由は、「チャイムをなくすこと」で、自主性が育つからです。なぜ自主性が育つのか、というと、自分で時間を確認しながら行動するようになるからです。自主性が育つことで、行動が積極的になり、生徒会活動なども今まで以上に活発になる、というプラスの効果も生まれます。

佐藤

ありがとうございます。続いて山田さんから、「チャイムは必要である」という立場で、意見の発表をお願いします。山田 はい。私たちは、チャイムは必要だと思います。理由は、「チャイムに従って行動することで生活のけじめが身につくから」です。チャイムが鳴ると、例えば授業と休み時間とははつきり区別されます。そこで気持ちを切り替えることで、けじめのある生活が送れるようになります。けじめのある生活シユウカンを身につけることは、学校の中だけでなく、日常でも基本となる大切なことです。

佐藤

ありがとうございます。では、山田さんから中村さんへ、反論をしてください。準備はいいでしょうか。では、お願いします。

山田 はい。自主性が育つことと、生活のけじめを身につけることと比べると、「まず生活のけじめの方を先に身につけるべきだ」と思います。私たちが将来、社会に出て行った時のためにも、今から生活のけじめを意識しておく必要があります。そのためには、やはりチャイムによって気持ちを切り替えることが必要です。自主性は、その後で身につけても遅くはないと思います。

佐藤

ありがとうございます。では、続いて、中村さんから山田さんへ、反論をしてください。準備はいいでしょうか。では、お願いします。

中村 はい。「チャイムは必要である」と考えるグループからの反論は、「自主性は、生活のけじめを身につけた後でも遅くはない」でした。私たちは、「まず自主性を身につけよう」とすれば、生活のけじめは自然と身につく」と思います。だから、やはりチャイムは必要でないと思います。チャイムに頼らず、私たち生徒が、自分で次に何をしなければならないのかを考えながら、学校生活を送っていく過程で、生活のけじめをつける、という意識も高まります。

このように、チャイムをなくすことで、自主性と生活のけじめの両方を身につけることができると思います。

① 山田さんの発表の中には、「けじめのある生活シユウカン」の「シユウカン」を、漢字に直して楷書で書きなさい。

② 中村さんと山田さんの意見の違いを整理したものとして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 中村さんの意見は「チャイムをなくすこと」で生活のけじめが身につく」であり、山田さんの意見は「チャイムを鳴らすこと」で自主性が育つ」であった。

(2) 中村さんの意見は「チャイムを鳴らすこと」で自主性が育つ」であり、山田さんの意見は「チャイムをなくすこと」で生活のけじめが身につく」であった。

(3) 中村さんの意見は「生活のけじめが身につく」とで社会に出て行ったときに役立つ」であり、山田さんの意見は「自主性が育つこと」で生徒会活動が活発になる」であった。

(4) 中村さんの意見は「まず自主性を身につける必要がある」であり、山田さんの意見は「まず生活のけじめを身につける必要がある」であった。

③ 中村さんの反論の組み立て方の工夫を述べたものとして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 比喩表現を多く使って、自分の主張をわかりやすく伝えようとしている。

(2) 相手と共通する自分の体験を取り上げて、相手の感情に訴えようとしている。

(3) 相手の発言の一部を取り上げて、反論のポイントをはつきり示そうとしている。

(4) 具体的な資料を示して、自分の主張に説得力を持たせようとしている。

注意 字数が指定されている設問では「、」や「。」も一ます使いなさい。

1

【聞き取り検査】放送による指示に従いなさい。答えは、解答用紙に記入しなさい。

2

次の文章は、自然の風景の色彩に心を引かれ、何よりも絵を描くことが好きな中学校二年生の圭海が、姉で高校一年生の暁美から進路のことでの厳しく非難され、ケンカをしてしまったその後に続く場面である。圭海はショックのあまり自分の部屋に戻り、机に突つ伏して泣いている。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

(私、お姉ちゃんから憎まれてるんだわ。)心が凍りつきそうだった。(これは、ただの兄弟ゲンカなんかじゃない。)お互に、シユウフクしようのない不信感を芽生えさせてしまったのである。

圭海は思つた。もう一度と、暁美の顔を見るのはよそう。何か聞かれても返事もしない。彼女に対しでは、徹底的に無視を決め込むのだ。圭海は固く心に誓つた。だが、家族の中にそういう人が一人でもいるということは、なんて不幸なのだろう、と悲しくなるばかりだつた。

ドアにノックの音が響いて、誰かが部屋に入つて来た。ノックなんかする人は、^④祖母以外には考えられなかつた。圭海は、机に伏した姿勢をもとに戻して背中を立てた。しかし、祖母の方には振り向かなかつた。ただの兄弟ゲンカに負けて、泣いていると思われるのはしゃくである。彼女は、泣き顔を怒り顔に変えて、祖母の出方を待つていた。

「タマちゃん。おばあちゃんね、いいもの作つてみたのよ。」圭海の心とは裏腹に、祖母はうきうきした調子で彼女のものとに寄つて来た。そして、両手で大事そうに包み込んだ丸いものを、彼女のすぐ目の前でパツと開いて見せた。涙に湿つた目に、いきなり鮮やかな色彩が飛び込んできた。圭海は激しくまばたきを繰り返す。

それは、いくつもの色糸で、ていねいに巻き付けられた「つまり」なのだつた。こんな色美しいてまりを、彼女は今までに見たことがなかつた。「御殿まり」つていうのよ。飾り物なの。」つまりには、束ねられた赤い房が付いている。同じ赤の色糸の地には、星形の模様が二面大きく配置されていて、星の中には幾すじもの、とりどりの色糸の帯が並んでいた。

「いろいろなのを作つてみたのよ。他にもあるんだけど、よかつたらおばあちゃんのお部屋に見に来ない?」祖母は穏やかに誘いかけてきた。圭海はちよつと目を伏せて、こつくりうなづくと、祖母の後について下に降りて行つた。祖母の部屋に入ると、なんだかとても良い匂いがした。お香を焚いているようだつた。部屋の隅に積み上げられた衣装ケースのひとつから、祖母はさつきの「つまり」をいくつも出してきた。さつき見せてくれたものと同じサイズのものがあれば、夏みかんほどの大きなものや、逆にピンポン玉くらいのかわいらしさのまであつた。色彩も実に豊かである。

「どれでも好きなの、タマちゃんにあげる。」祖母は、つまりの入った衣装ケースをのぞき込む圭海に、小声でささやきかけた。

「ほんとう?」圭海は、目を輝かせて聞き返す。

「本当はね、全部あなたにあげようと思つてゐる。だつてタマちゃんは、こういうのが大好きでしょ。」祖母は、さつきの暁美とのいさかいの件で、圭海に同情して言つてくれているのだろうか?「タマちゃんは、絵が上手なものね。」なんだか、無理してほめてくれているようだ。

「たいしたことないわ。」^⑤圭海が沈んだ声を出すと、「ううん、タマちゃんの絵の才能は、うちのおじいちゃんに似たのよ。」しみじみと、うなずきながら言う。「おじいちゃん?」「そうよ、おじいちゃんもあなたと同じ、とっても絵の好きな人でねえ。ほら、あそここの壁に掛かってるヌノも、おじいちゃんが描いた絵を、おばあちゃんが刺しゅうしたものなのよ。」祖母が指さしたタペストリーは、かなり大きな作品だつた。キクやハギやキキョウなど、日本で親しまれてきた秋の花々が、ていねいにデザインされ、ヌノの上に形よくちりばめられている。

「ね、タマちゃんもお花が好きで、前に絵に描いてたことがあつたでしょ。だから、やっぱりおじいちゃん似なのよ。」祖母には悪いが、圭海は亡くなつた祖父のことを、あまりよく覚えていない。

非常に寡黙で、頑固そうな老人だつたからだ。このおとなしい両親

から、なぜ父のような眼やかな息子が生まれてしまつたのか、圭海は不思議でならない。むしろ圭海の方こそが、この祖父母の控えめな性格を受け継いだのかも知れなかつた。さらに、圭海の目は、この祖父にそつくりでもあつた。「おまえは、水島のおじいちゃん似だな。」と父から言われるたびに、彼女は嫌な気がしたものである。「おじいちゃんは、立派な方だつたのよ。」祖母は、部屋の小さな仏壇から、祖父の遺影を取り出してきて圭海に見せた。写真の中のむすつとした顔も、やつぱり圭海に似ていた。祖母は暫く、その写真を両手にとつてながめている。

圭海は思う。(おじいちゃんとおばあちゃんて、きっとすごく仲が良かつたんだろうな。)祖母の部屋のタペストリーが、一人の樂しかった生活を物語つてゐるようにも見えた。(おばあちゃんが今でも尊敬してゐる、絵の上手なおじいちゃんか……)そんな祖父に似た、口下手な自分のことも、いつか愛せる日がくるのかも知れない。そう思ふと少しだけ、凍えかかった気持ちもじんわり緩みはじめてきた。彼女は改めて、祖母の脳やかな部屋をゆっくりと見渡した。

(出典 鈴木八栄子「15歳こころの三原色」)

注 タペストリー——色糸などで風景などを織り出した壁掛け。

① — の部分⑦、⑨を漢字に直して楷書で書きなさい。
② 「^⑩」という漢字を行書で書いてときの「くん」として適當なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 本 (2) 王 (3) 曰 (4) 且

③ 「ちよつと」の品詞名を、漢字で答えなさい。

④ 「泣き顔を怒り顔に変えて」とあるが、圭海がそのような態度をとつたのはなぜか。その理由として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 自分が机に伏して泣いていたわけを、祖母に誤解されること

(2) 泣いている自分ではなく、きっと祖母は姉に味方するにちがいないと思つたから。

(3) はしゃいでいる様子の祖母を見ていらだち、徹底的に無視してしまおうと思つたから。

(4) 今の自分の悔しい気持ちを、祖母にぶつけすることで気を晴らしたいと思つたから。

⑤ 「圭海が沈んだ声を出す」とあるが、圭海の返事の声が沈ん

のうちではどれですか。

(1) 自分と自分の両親との共通点を祖母に指摘されて驚くとともに、祖母の生き方への共感が生じている。

(2) 落ち込んでいた心が祖母とのやりとりによつて和らぎ、あるがままの自分を受け入れ始めている。

(3) 祖父を尊敬する祖母の姿勢に感動し、自分も姉を尊敬していかねばならないと反省し始めている。

(4) 絵が好きだったという祖父を見ならい、自分も祖母のために絵の才能を磨こうと決意を固めている。

次の文章は、「記憶」について論じたもので、一回一回起る「出来事の記憶」と、概念などに關する「意味の記憶」の重要性について述べた文章に続く部分である。これを読んで、①～④に答えなさい。

記憶にはもうひとつ大事なものがあります。何かをやる時の手順の記憶です。たとえば九九を考えてみてください。九九八十一（ケク・ハチ・ジユ・ウイチ）は9カケル9のカケル（X）を省略して覚えているわけですが、さらには $9+9+9+9+9+9+9+9+9$ とありますと、たとえば「四に二をカケル」、という時のカケルは、「四を二回たす」という手順を意味します。

このような、カケルという手順は「一回聞いても覚えられるものではありません。何度も何度も教わって、何度も何度もやつてみて、そのうちにその意味が定着してゆくのです。このやり方で進んでければ、この問題は正しく処理出来、今浮かんでない答えに到着出来る、という手順の記憶です。同じように、記号の操作を手順化したもののがいっぱいあります。数学などはほとんどが手順の記憶です。最初はモノのイメージなのです。三個の具体的なリソース、あるいは三四の具体的な大なのですが、その具体的イメージから3という数だけが抽象化され、概念化されます。数学などはほとんどが手順化します。文を読んで、理解出来るのも手順の記憶を積み上げてきたからです。文は単語とは別の意味を運びます。いたずらにただ単語を連ねてしまふと、もう具体的なイメージを想起する必要はなくなります。文を読んで、理解出来るのも手順の記憶を作り上げてしまふと、もう具体的なイメージを想起する必要はなくなります。筆者がもし、「単語をただなりません文には連ねても」と書いたとしたら、読者のあなたは意味がわからず、なんだこれ、と放り出でてしまう。数学のように世界共通の明白さではなく、かなり暗黙的なものですが、日本語ならば日本人仲間の間にちゃんと単語の並べ方にについての約束事が成立していて、そのまま順にしたがつて言葉を並べないと、相手にはわからないのです。このような言葉のつなげ方の手順は文法と呼ばれています。文を作るときの、あるいは文を理解するときの法則です。かなり融通の利く経験的法則ですが、やっぱり法則です。

「田一枚植えて立ち去る柳かな」

という芭蕉の句は名句として知られていますが、筆者には最初なんのことかさっぱりわかりませんでした。この句には、話し言葉

4

次の文章は、中国の北宋時代の詩人である蘇軾の漢詩とその解説文である。これを読んで、①～④に答えなさい。

蘇軾の詩に、「六月二十七日、望湖樓醉書」というのがあります。古典の世界では普通、陰曆を用いています。だから、六月は夏の終わりです。

(書き下し文)
① 黒雲翻墨未遮山 黑雲 墨を翻して 未だ山を遮らざるに
② 白雨跳珠乱入船 白雨 珠を跳らせて乱れて船に入る
卷地風来忽吹散 地を巻き風來たりて 忽ち吹き散すれば
望湖楼下水如天 望湖楼下 水 天の如し

またたく間の、天候のかわりようです。黒い雲の広がり方を、墨を翻す、と表現しています。見る見るうちに、空ににじむように広がつていったのでしよう。ぱらぱらと降りはじめた雨は、珠を跳らせる、と表現しました。音までがきこえてくるようです。風が「吹き散」じたのは、雨か雲か。詩人は雨のあがつた湖水をみつめます。すると水面は、もうまるで青空そのもののように、青くかがやいています。

夏もそろそろ終わりです。秋めいた気配もしのびります。けれどまだまだ夏らしく、すべては鮮烈です。雲の広がり方、雨の吹きこみ方、風の吹き方、青空のあらわれ方、どれもが勢いゆたかであります。そこに夏という季節の激しい生命感があります。蘇軾は、ただその奔放な時間を表現しただけです。自然の怒濤のようなうつろいと、その結果一瞬にしておとずれた、抜けるような青一色の美しさいます。

次の中は、「人間関係」と「距離感」について書かれた文章の一部である。これを読んで、――の部分の筆者の意見に対するあなたの意見文を、百五十字以内で書きなさい。なお、意見文には、あなたの主張が的確に伝わるよう、その根拠となる具体例を含めなさい。

私が長年つきあいの続いている友人関係を考えると、長いつき合いになればなるほど、親しいとはいえ、知らず知らずのうちに一定の距離をおいている。親子や夫婦となればその距離感は少し違ってくるが、他人との関係となると、やはり、お互いの間の距離感といふのは、とても大切なのはなかろうか。あまりに近づきすぎると、どうしてもぎすぎすしてしまうことがあるのだ。

5

あなたの意見文を、百五十字以内で書きなさい。なお、意見文には、あなたの主張が的確に伝わるよう、その根拠となる具体例を含めなさい。

に使われる単語のつなげ方にについての手順の記憶は通用しません。俳句愛好者の人たちが作り上げてきた言葉のつなげ方にについての約束事、あるいは俳句の読み解き方がわからないと理解出来ないのであります。

この句は「田一枚植えて」で一回切って、水田ひとつ分のイメージを呼び出し、そこにしやがみ込んで稻の苗を植えている人たちをイメージします。ついで「□」を切り取つて、その人たちが田植えを終了して帰つてゆく姿をイメージします。最後にそこまでのイメージを消し去つて、「植えられ終わつた人気のない水田と、その横に立つ柳の木」をイメージします。このような俳句独特の読み解き方がないと、さっぱりわからないのです。筆者はこの句を、立ち去る柳、とまとめて読んでいました。そのため柳の木が田植えにやつてきて、田植えをして、またどこかへ帰つてゆく、というシーンをイメージして、わけがわからなかつたことを思い出します。

このように言葉のつなげ方も重要な手順の記憶です。決して一度で覚えられる記憶ではありません。毎日毎日繰り返して言葉を聞き、自分で毎日毎日繰り返し言葉を使うという生活の中で、共通のつなげ方が抜き出され、手順の記憶として定着してゆくのです。

われわれは文法を文法書によつて覚えるのではありません。日常生活の中で自然に抜き出してゆくのです。文法書はそのようなわれわれ日本人の心に共通する約束事を記録したものにすぎません。われわれは文法を文法書によつて覚えるのではありません。日常生活の中で自然に抜き出してゆくのです。文法書はそのようなわれわれ日本人の心に共通する約束事を記録したものにすぎません。

(出典 山島重「わかる」とはどういうことか)

① ――の部分⑦、⑧の漢字の読みを書きなさい。

② 「言葉のつなげ方の手順」と同じ内容を述べた部分を、これより前の文章中から十五字以内で抜き出して書きなさい。

③ □に入れるのに適当なことばを、芭蕉の句から抜き出して書きなさい。

④ 「われわれは……ゆくのです」とあるが、「文法」を「覚える」とは、具体的にどのようなことだと筆者は考えているか。文章中のことばを使って五十五字以内で書きなさい。

――それを私たちが体験できればよいのだと、私は思います。^④自然がこのように奔放で表情ゆたかなこと、それに共鳴する力にみちた心がここにあること、それを言葉にしたというのが、この詩の「意味」でしょう。

(出典 安藤信広「漢詩入門はじめのはじめ」)

⑤ 望湖樓——湖を眺めるための建物。 隅曆——月の満ち欠けを基準にして決めた暦。 怒濤——荒れ狂う大波。

⑥ ① 「黒雲」と対比的に用いられていることばを、漢詩の中から抜き出して書きなさい。

⑦ 「白雨跳珠乱入船」が書き下し文の読み方になるように、解答欄の漢文に返り点を付けなさい。ただし、送りがなは付けないこと。

⑧ 「夏という……あります」とあるが、その様子来形容したことばを、これより前の解説文中から漢字一字で抜き出して書きなさい。

⑨ 「自然が……ここにあること」とあるが、この漢詩の中で蘇軾が共鳴した「奔放で表情ゆたかな」自然として最も適当なのは、次の(1)～(4)のうちではどれですか。

⑩ (1) 季節の激しい変化と銀色にかがやく湖面
(2) 突然の激しい雷雨と湖面に映る黒い雲
(3) 天候の急激な変化と青くかがやく湖面
(4) 青から黒へと急に色を変えた湖面と空

そんなことをいつたら、本当に親しい間柄になれないのではないかという反論も出てくるかもしれない。しかし、人間関係といふのは、個人と個人の間の距離、それがどの程度の距離かは別として、どのような距離を取りながらつき合つていくかという距離感が大切だ。

(出典 斎藤茂太「心がかるくなる生きかた」)

受検号
(算用数字)
志願校

解答用紙

※

